グローカル化する若者文化（４）性の不活発化と親密圏の変容

首都大学東京大学院　大倉韻

１　目的

本研究の目的は、現代日本の若者における性の不活発化傾向について、家族関係や友人関係などの他の親密な関係性との関わりから分析を加えることである。性行動の不活発化はこれまでも多方面で指摘されてきており、その原因として「草食（系）男子」「性の分極化・リスク化」などが指摘されている（高橋 2013 ほか）。しかしそれらの研究は若者と性行動の直接的な関係を検討するものが多く、より広い文脈からそれを解釈することには消極的であったように思われる。

そこで本研究では、彼らをとりまく親密な関係性の全体を分析対象とし、彼らの性行動がどのように変化してきたのかを検討する。社会全体の不透明感が増大する中で、対人関係も不透明化・リスク化が進行しているが、その中で性行動もより安定的でかつ他の人間関係を阻害しないようなあり方が希求されるようになっているのではないだろうか。

２　方法

2015 年に東京都杉並区と愛媛県松山市で 20 歳を対象に実施した質問紙調査、および一部調査項目を共有する 1990 年、2005 年、2009 年調査のデータを使用した（詳細は本部会第一報告要旨を参照）。本報告で用いる質問項目は恋愛交際経験、「恋愛は何ごとにも替えがたい」など恋愛に対する態度を中心に、家族項目・友人項目・基本属性などを投入した。

３　結果

恋愛交際経験は 90 年調査以降減少を続けているものの、2005 年以降は大きな変動が見られなくなっているが、恋愛至上主義的な恋愛観は支持を低下させ続けており、最も高かった 90 年と比較して半分程度に達していた（90 年 67.6%→2015 年杉並 36.7%/松山 42.5%）。一方で「恋愛と結婚は切り離せない」とする意識は増加しており、特に地方都市でその傾向が強くなっていた。地方都市では性に関して「両親の影響を受けた」という回答が大都市よりも大きく増加しており、恋愛を非日常的なものとしてではなく日常と地続きのものとしてとらえている様子がうかがえた。大都市においては恋愛行動を趣味的なもの、あえてするものとして捉える傾向が見られ、ギデンズのいう「純粋な関係性」により近い恋愛行動が取られていることが示唆された。

４　結論

端的に述べるならば、かつて友人関係や家族関係よりも優位にあるものとされてきた恋愛関係は、今ではその不透明さや関係維持のコストが敬遠されて友人や家族といった関係性と同程度かあるいはより低い立場しか与えられていないようであった。むろんそこには、刺激的な大都市を嫌って地方都市の「ほどほどパラダイス」（阿部 2013）に安住しがちな彼らの自己意識が反映されているだろう。当日は多変量解析も含めより詳細な報告を行う予定である。

参考文献

阿部真大，2013，『地方にこもる若者たち―都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版.
高橋征二，2013，「欲望の時代からリスクの時代へ―性の自己決定をめぐるパラドクス―」日本性教育協会編『「若者の性」白書―第 7 回 青少年の性行動全国調査報告―』小学館.